

救急蘇生の新しい動き

GRA (Global Resuscitation Alliance)

～ OHCA の社会復帰率をさらに改善させるための世界共同の取り組み～

第七回 大阪蘇生アカデミーでのこれまでの取り組みと今後の展望

大阪急性期・総合医療センター 救急診療科 京都大学 環境安全保健機構 健康科学センター
木口雄之

成り立ち

大阪では1998年から「ウツタイン大阪プロジェクト」を継続し、病院前救急医療の客観的な検証と改善、情報発信を実践し、国際的にも高い評価を得てきました。そのウツタイン大阪の基盤を生かし、2013年に、シアトル市で心停止からの救命率向上をミッションに開催されている Resuscitation academy の思想を取り入れ、「大阪蘇生アカデミー」を立ち上げました。日々最前線で活動し、記録をしている救急隊員等を主な対象として、ウツタイン統計から得られたデータや最新の蘇生科学の知見を共有し、客観的な評価に基づく病院前救急医療の質の改善、院外心停止傷病者の救命率の向上を進めていくことを目的としています。

第1回の「CPRの質の向上と質の保証の重要性」を皮切りに、毎年キーテーマを設けて、これまで計8回開催してきました。大阪蘇生アカデミーでのこれまでの取り組みを紹介いたします。

これまでの取り組みとその内容

記念すべき第1回は「CPRの質の向上と質の保証の重要性」というキーテーマのもと、病院外心停止のレジストリーと病院前救急医療体制の

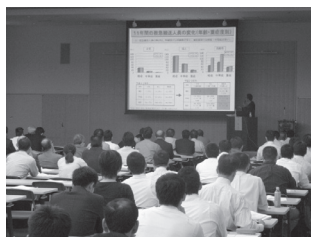


写真1 第1回大阪蘇生アカデミーでの講演の様子

質の管理という2つのテーマのシンポジウムと、世界各地の先進的な取り組みを紹介するセッションを用意し、アジアも含め第一線で活躍している救急医・研究者、消防本部からトピックスをご紹介いただきました。

キーレクチャーには、厚生労働省の立場から病院前救急医療の充実に尽力されている先生に加え、本領域の世界的リーダーであるアリゾナ大学 Bentley Bobrow 先生をお招きし、アリゾナで実践されている胸骨圧迫を連続して行うパラメディックによる CPR もデモ展示していただきました。



写真2 ハイパフォーマンス CPR の実践と Bobrow 教授による解説 (第1回)

救急救命士を中心に計147人の参加者があり、世界の最新の取り組みや、日本の現場からの報告を通じ、CPRの質を向上させる重要性と、最前線で働く救急隊員、医師、看護師と研究者が協力して、集積されるデータを科学的に評価し、エビデンスとして発信するとともに現場の行動の改善に繋げることの重要性を広く共有することができました。

第2回は「救急現場への教育」をテーマに据え、厚生労働省の病院前医療対策専門官からの「処置拡大とこれからのメディカルコントロール体



写真3 Jonathan Larsen 氏による救急隊教育システムの講演 (第2回)

制」についての講演に加え、プレホスピタルの最先端をいく、米国シアトル市消防から Jonathan Larsen 氏を招き、救急隊の教育システムと救急活動評価のフィードバックの方法について講演いただきました。

その他、第1回に参加された方から要望が多かった、現場で実際活躍されている救急救命士の最新の取り組みをテーマとしたシンポジウムを組み、活発な議論がなされました。また、新しい取り組みとして実際の症例を提示して質問形式による教育講演を行い、救急医の目線から救急現場におけるピットフォールの紹介も盛り込みました。医師、看護師、救急救命士、消防士と、様々な職種から延べ173人という多数の参加者を得られました。

第3回はガイドライン変更の年度でもあったため、「心肺蘇生法ガイドライン 2015 最前線～現場はどう進化すべきか～」をテーマに据え、特別講演として帝京大学医学部救急医学講座の坂本哲也教授に新ガイドラインの改正点とこれからの方向性について講演いただきました。また、シンポジウムとしては、「救急ワークステーションの効果」として各地で行われているワークステーションの課題と展望について討論いただきました。

第4回は「院外心停止救命のベストアプローチ」をテーマに据えて、現場で活躍する救急隊員に有益となるプログラムを用意しました。特別講演として、救急



写真4 第4回での企業展示の様子

振興財団救急救命東京研修所の田邊晴山教授に救急現場での蘇生中止におけるニーズと課題について講演いただきました。シンポジウムとしては、病院前救護の充実に尽力されている臨床医の先生方に加え、指導的立場でご活躍なさっている救急救命士の方々もお招きし、メディカルコントロールについて各地域で試みられている最新の取り組みを紹介いただき、討論いただきました。参加者数：256人

第5回は「現場へのガイドラインの落とし込み」をテーマに据えて、救急隊員が現場で行う病院前救護の質向上をめざし、特別講演、教育講演およびシンポジウム

を用意しました。特別講演として地方独立行政法人堺市立病院機構の横田順一郎副理事長から外傷蘇生とファーストエイドについて講演いただきました。

シンポジウムとしては、「救命につながる蘇生プロトコルを考える」をキーテーマに、消防司令室における心停止早期発見の取り組みと救命ボランティアとの連携、胸骨圧迫の

フィードバック機能が附加された除細動器の現場での活用、現場における積極的な薬剤投与、救急初療室における経皮的心肺補助装置導入のプロトコルについて、それぞれ講演および討論をいただきました。

最新の知見を共有するとともに、行政、病院、消防と異なる立場から救急現場のプロトコルについて活発な意見交換を行いました。参加者数：230人

第6回は「ガイドライン 2020 に向けて」をテーマに据えて、特別講演として日本蘇生協議会代表理事の野々木宏先生をお招きし、「蘇生ガイドライン 2020 作成に向けて：我が国の国際貢献と今後の展望」について講演いただきました。その他、小児蘇生学からの展望についても講演いただきました。

この年から新たな試みとして「現場滞在時間と特定行為のタイミング」と題した Pro/Con デイバート型のシンポジウムを企画し、救急隊が傷病者に接触した現場において気

管挿管などの特定行為をどのタイミングで行うのか、滞在時間をどのように考えるのかについて、Pro と Con の立場での講演およびディスカッションを行い



写真5 横田順一郎副理事長による外傷蘇生の講義(第5回)



写真6 蘇生プロトコルについてのシンポジウムによる活発なディスカッション(第5回)



写真7 第6回から新たに始めたPro/Con デイバート型のシンポジウム

ました。参加者数：230人

第7回は「病院前救急医療体制の課題と展望」をテーマに据えて、立川病院の三田村秀雄院長に特別講演として「除細動を30秒でも早く：10分で消える命」と題して、迅速な胸骨圧迫、除細動を教育する重要性についてご講演いただきました。その他、シアトル市で実践されている院外心停止に対する病院前救急医療体制の評価について紹介いただき、日本でも同様に病院前救急医療体制の評価とその問題点の可視化についての必要性が提示されました。前年度から好評であったPro/Con ディベートは「救急隊によるDNARオーダーを用いた蘇生中止は可能である」をテーマに救急隊が傷病者に接触した現場において医師の事前指示や家族の希望に基づき蘇生を行わない選択について、実際大阪であった事例提示を行いその課題について討論いただきました。全体を通して消防庁救急専門官をコメンテーターとして多くの意見をいただきました。参加者数：286人



写真8 第7回での講演の様子

第8回は「With コロナ時代の救命対応」をテーマに据えて、昨今の新型コロナウイルス感染拡大に配慮し、初の完全オンライン開催で行いました。特別講演としてアメリカピッツバーグでParamedicとして活躍されている二宮智将氏を招き、「With コロナ時代の救命対応～ピッツバーグの現場から～」と題する講演では、アメリカにおける病院前救急活動をご紹介いただき、COVID-19感染が最も流行している国での救命対応の実情に触れることを通じ、日本における病院前救急医療活動に大変参考になる講演をいただきました。教育講演では、『COVID-19対応—世界の潮流と我が国の取り組み—』と題し、COVID-19流行期の蘇生アルゴリズムについて、普段の対応との違いに焦点を置き講演いただきました。シンポジウム「With コロナ時代の救命対応」では、「救急業務における新型コロナウイルス感染症の対応」、「第1波、第2波から見えてき



写真9 初めての完全オンライン開催の様子(第8回)

た救急医としてのコロナ対応の課題点、「人工呼吸管理を要した重症COVID-19感染症例に対する当院での治療成績」と題して、3演者からコロナ禍における救命対応の実情を共有していただきました。リアルな現場の状況についての講演を通じ、ディスカッションも大いに盛り上がりました。参加者数：延べアクセス数700件超となり、全国から過去最大の参加をいただきました。

今後の展望

過去8回の開催を踏まえ、大阪蘇生アカデミーは大阪だけの枠にとらわれず、全国へ発信可能な研究会として発展してきました。今後も目



写真10 記念写真(第7回)

的である、最前線で活動し、記録をしている現場の救急隊員等に還元できる内容を意識し、得られたデータや最新の蘇生科学の知見を共有し、客観的な評価に基づく病院前救急医療の質の改善、院外心停止傷病者の救命率の向上を進めていくことを念頭において、活動していきたい。